

## ブナの森から縄文の世界へ

一般財団法人青森地域社会研究所  
理事長 成田 晋



1978年7月、東北初の地銀系シンクタンクとして産声を上げた当研究所は、来る2020年4月1日をもって「あおり創生パートナーズ株式会社」と合流する。当研究所は、設立以来40年余りにわたり、青森県内の産業振興および地域社会の発展に貢献すべく、その時代の要請に即した調査研究を行ってきた。まずは当研究所に対する皆様のご厚誼に感謝し、心より御礼申し上げる次第である。

当研究所が設立された1978年は、高度経済成長から安定成長への転換期にあたり、環境問題が深刻化した時代であった。当研究所の設立趣意書にも、「昭和48年の石油ショック以来の低成長路線への転換に際し、失われつつある人間性の回復と国土、資源の問題をエコロジーの観点から見直して見る必要がでてきた」と記されている。

本県には、世界自然遺産「白神山地」があるが、この手つかずのブナの原生林に、普遍的価値が認められるきっかけとなった出来事が、奇しくも1978年に起きている。林業振興を目的とする「青秋林道建設計画」である。工事は1982年に着工されたものの、白神山地より流出する河川の環境汚染を危惧する流域住民や、生態系保護を訴える自然保護団体による反対運動により、1987年、工事は中止となった。地域住民を巻き込んだ保護運動の展開により、役立たずと言われたブナの森に、世界は価値を見出したのである。そして1993年12月、白神山地は、屋久島とともに我が国初の世界自然遺産に登録された。

現在、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録に向け、着々と準備が進められているところであるが、縄文遺跡群の中

核が「三内丸山遺跡」であることは言うまでもない。三内丸山遺跡が世界から注目を集めるきっかけとなった出来事は、1992年の新県営球場建設計画である。事前調査として行われた発掘の結果を受け、1994年、県は球場建設を中止し、遺跡の保存を決定する。三内丸山遺跡は、日本の歴史教科書を書き換え、従来の世界的常識に一石を投じた。かつての歴史教科書が教えた縄文人は、狩猟採集を生業とした移動生活者に過ぎない。ところが、三内丸山の集落には最大で500人の人間が定住していた。農耕を基盤とする古代の大文明が、気候変動と自然破壊によって崩壊していった時代に、三内丸山の縄文人は1500年にもわたり文化を継承したのである。

2021年夏、登録が実現すれば、本県は自然・文化の両世界遺産を有することとなる。ブナの森から縄文の世界へ。役立たずと思われていたものに見いだされた普遍的価値。それは、設立趣意書に謳われた、「失われつつある人間性の回復と国土、資源の問題をエコロジーな観点から見直した」結果によるものであり、当研究所の40年余りの歩みと軌を一にするものと言えるのではなかろうか。

当研究所が歩んだ40余年の間に、社会は目まぐるしく変化した。地域社会は、少子高齢化、人口減少という大きな課題を解決できていない。しかしながら、ブナの森と縄文の世界観は、社会の持続可能性を探る上でヒントとなり得る。その上で、当研究所が培ってきた知見を、あおり創生パートナーズにしっかりと引き継ぎ、地域の皆様の課題解決ならびに、地域の持続的な発展のために尽力してまいり所存である。